



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学芸カフェテリアに関する資料の性格とその保存のあり方(fulltext)
Author(s)	藤井,健志
Citation	東京学芸大学大学史資料室報, 6: 2-8
Issue Date	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/159354
Publisher	東京学芸大学大学史資料室
Rights	

学芸カフェテリアに関する資料の性格とその保存のあり方

藤井健志（人文社会科学系教授）

はじめに

本稿では、大学にある様々な資料のどれを残し、どれを廃棄すべきか、またその残し方はどのようにすべきかということについて、一つの事例に基づいて考える。このことは同時に、本学に置かれた大学史資料室の目的や、存在理由について考えることも意味している。

本学の大学史資料室は、「東京学芸大学大学史資料室規程」では、本学の歴史に関する資料の収集等を目的とすることとなっているが¹、本来の目的には、歴史に関する資料とともに、保存期間の過ぎた法人文書を保管することも含まれるべきである。その理由および、それにもかかわらず、なぜこのような規程になったのかについては、かつて若干の考察をしたことがある²。その経緯から、現在、大学史資料室では保存期間の過ぎた法人文書の保管にも取り組んでいる。しかし、現在、資料を保存するスペースの余裕がないという批判が、事務職員から強く出されている。そのため大学史資料室としては、保存期間の過ぎた法人文書の何を廃棄し、何を残すべきかということについて、より具体的な検討を迫られている。本稿は、こうしたことを念頭に置いて書かれたものである。

事例として取り上げるのは、2007年度に開設され、2018年度末に閉鎖された学芸カフェテリア（以下カフェテリアと略す）である。カフェテリアを取り上げるのは、ここが本学内の一般的・恒常的な組織（たとえば図書館のような）ではなく、特別な予算に基づいてつくられた、短命（10年間）な学内組織であったことに関係している³。こうした組織であるため、第一に設置から消滅に至るまでの資料が比較的まとまっていたこと（このことはカフェテリアが独自のスペースをもっていたことにもよる）があげられる。かなり活発な活動をしてきた組織であるために、10年前の設置時の事務的な資料も残されていたのである。第二に、このように消滅した学内組織の資料が、今後どのように学内に残されるべきかを検討すべきだと考えたのである。消滅した組織の資料は、必ずしも歴史的な意味だけしかもっていないわけではないと思うからである。

以上のような考えに基づいて、本稿ではカフェテリアに関わる資料の性格と、今後どのように残すべきか（あるいは廃棄すべきか）を、資料に即して具体的に検討してみたい。

1. カフェテリアの概要⁴

最初に書いておかなければならないのは、学芸カフェテリアが、普通「カフェテリア」と呼ばれている飲食を目的とする食堂ではないことである⁵。学生のキャリア支援をする組織に「学芸カフェテリア」という名称が付けられたのである。

カフェテリアは、もともと文部科学省と日本学生支援機構によって2007年より始められた「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（いわゆる「学生支援GP」⁶）において、同年9月に採択された「学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援—全学の援助資源の活用と最適化された学生支援プログラムの開発—」に基づいて開始されたものである⁷。

このようにカフェテリアは、基本的には学生のキャリア支援のための組織であるが、大学のキャリア支援に関わる部署が企画した講座等を、一方的に学生に提供するのではなく、二つの方向で多様な支援の実現を目指すものであった。第一に大学側に関しては、大学が潜在的にも様々な援助資源（施設・設備および人的資源）を積極的に発掘し、「見える化」する。第二に学生側に関しては、大学から提供される「定食」を享受するだけでなく、自身のキャリア発達課題を意識し、自分のニーズにあった支援メニューを選択できるようにするという二つの方向である。「カフェテリア」という名称は、後者に関係している⁸。

GPの予算は4年間にわたって措置され（2007年度～2010年度）、カフェテリアの運営経費として使われた。しかし、このカフェテリアの特徴は、GPによる予算措置が終了した後も、大学の独自予算によって活動が継続されたことである。従ってカフェテリアの歴史は、2007年から2011年3月までの第一期（4年間）と、2011年4月～2019年3月の第二期（6年間）に分けられる。

第一期では、カフェテリアを実質的に運営するスタッフ⁹を中心にして（後述するようにスタッフ会議が最初のうちは開かれていた）、学芸カフェテリア推進プロジェクト委員会および外部評価委員会¹⁰が、カフェテリアの活動を進めていく。同時に学生モニター（2008年という早い時点で、カフェメイツと改称される）が決められて、スタッフとともに、カフェテリアの実際の運営に積極的に関わるようになる。

カフェテリアの活動は、学生に向けた講座の開設¹¹、学生のニーズに合わせた相談¹²、カフェテリアのウェブサイト運営、カフェテリア・オフィスの運営¹³、印刷物の発行¹⁴等に分けられる。

第一期のこうした活動は、文部科学省からの予算が終了したため、一応終了する。ただし以後は、学内の予算措置によって、活動が継続される。カフェテリアは学内組織の学生キャリア支援センターに位置付けられ、カフェテリアについて議論する場合は、外部評価委員会から学生キャリア支援センター会議およびその中のキャリア形成部会となる。ただし、ここがカフェテリアのこのみを進める場ではないことには、注意する必要がある。第一期において、カフェテリアの推進プロジェクト委員になったり、外部評価委員会に関係していて、カフェテリアに深く関わっていた教員が、いなくなる（関わらなくなる）のである。

スタッフとカフェメイツを中心とする講座の運営や、キャリアプランナーによる学生相談は継続され、カフェテリア・オフィスやウェブサイトも継続される。スタッフ会議は、独立したものとしては開かれなくなり、カフェメイツ会議に合わせて、カフェメイツがいる場で検討事項が協議されるようになる。

この10年間に775回の講座が開催され¹⁵、学生相談は多い年にはのべ160人以上の学生に利用された¹⁶。このカフェテリアは、大学の方針で2018年度末に閉鎖された。スタッフはいなくなり、カフェメイツは解散した。本稿を執筆した2019年3月時点では、カフェテリア・オフィスの場合は、2019年4月以降は、就職相談室とディスカッションルームになると聞いている。

2. カフェテリアに関する資料

カフェテリアに関して、どのような資料があるのだろうか。ただし、本稿の執筆時点は、カフェテリアの閉鎖を目前にしているとは言え、まだカフェテリア・オフィスが存在していた時期である。言い換えると、大学がカフェテリアの資料をどのように残すか（あるいは残さないか）ということを決めておらず、多くの資料がカフェテリア・オフィスに残されていた時である。この時期に、主としてカフェテリア・オフィスに残された資料を基にして本稿は書かれている。このことが、以下の記述にある程度、影響を与えていると考えられる。このことに

は留意されたい。

さて、カフェテリア・オフィスに現時点で残されている資料は、三つの種類に大別できる。第一は、第一期から第二期の運営に関する原資料である。10年間にわたる会議資料や、支出簿、購入依頼書、講座の記録等が中心となっている。これらの多くは、ファイルに綴じられている。第二は、すでに触れているが、公刊された印刷物である。ブックレット¹⁷ および、『News Letter』¹⁸、それにカフェテリアが閉鎖されたときに刊行された『学芸カフェテリア 10年史』¹⁹ である。第三はその他のもので、ファイル化されていない資料、および講座のビデオ記録である。

紙幅の関係で、すべての資料に言及することはできないので、どの資料を保存すべきかということを考える手がかりとして、いくつかの視点から資料を見てみよう。まず資料の重複状況である。一つの例として、ここでは文部科学省へのGPの申請書を取り上げる。そこには当時、大学がカフェテリアをどのような形にしようと考えていたのか、またそこにどのような意義があると考えていたのか等が表明されているはずだから、カフェテリアにとってたいへん重要な資料になると思われるからである。

この申請書は、現在、カフェテリアに置かれている【推進プロジェクト会議】ファイル²⁰ および、【外部評価委員会】ファイルに綴じられている。また申請書は、ブックレット第1号にも掲載されているが、部分的に削除されていたり、図が少し改変されていたりする²¹。ここではファイルによって資料の重複が見られることと、公刊された印刷物に掲載された資料が、原資料通りではないことをおさえておきたい。

なお、逆に原資料になかった内容が、後の公刊物に記載されることもある。申請書そのものからは、申請に至った経緯等は知ることができないのだが、上に触れた『学芸カフェテリア 10年史』には、その経緯がある程度書かれている。

会議記録と、公刊された印刷物との関係をもう少し見てみよう。外部評価委員会の会議記録は、議題、配布資料とともに【外部評価委員会】ファイルに綴じられている。ただし第3回、第5回の会議記録はファイルにはない。それに対して、第3回の外部評価委員会の記録は、ブックレット第2号(pp.64～67)に、第5回については同じく最終報告書(pp.117～124)に掲載されている。

以上のことも含め、【外部評価委員会】ファイルにある会議記録と、ブックレットにある外部評価委員会の報告との関係は、少し複雑である。第1回委員会の記録は、ブックレットの方にはほとんど載っていないが、第2回委員会の記録は、双方にある(第1号のpp.21～26)。ただしファイルとブックレットとは少し内容がずれている。これはまとめた時の視点が異なるものであったからであろう。第3回と第5回については、上述の通りだが、第4回については、両者はほとんど同じである。第4回以外は、両者は補完的な関係にあり、片方に記載があることが、もう片方には記載されていない場合がある。両方を見て、はじめて全体の様子がわかるのである。

ファイルと公刊物の双方に記録が残っている例をもう一つあげておく。学生モニター会議(カフェメイツ会議)の記録は、第一期には【学生モニター委員会/カフェメイツ会議】ファイルとブックレットの双方に掲載されている。しかしファイルに綴じられている会議記録の方が、ブックレットの記録よりも詳しいのである。

次に委員会資料のあり方を見てみよう。委員会資料が重要なのは、カフェテリアの運営について、どのようなことが課題としてあげられ、どのように議論されていたのかわかるからである。たとえば【推進プロジェクト】ファイルには、学芸カフェテリア推進プロジェクト委員会の議題、配布資料、会議記録が綴じられている。議題や配布資料からも、当時の課題がわかるが、最も重要だと思われるのは会議記録である。残された会議記録には精粗はあるが、会議でどのようなことが論じられたかが、ある程度具体的に書かれているからである。

逆に言えば、会議記録や議事要録が詳細に書かれていない委員会資料は、その資料としての価値が落ちると言わざるを得ない。ある問題について、どのような意見が出され、どのように議論されたのかわからないからである。第一期の委員会資料と第二期の委員会資料とを比較すると、ここでも精粗はあるが、全体的に第二期の委員会の記録が簡素になっていて、議論の具体的様子がよくわからない場合が多い。「～について説明があり、審議の結果原案のとおり承認した」という記載形式が多くなっている²²。どのような意見が出て、どのように審議されたのかが記録されていないのである。結論のみで、議論のプロセスが示されていないということである。このことは、前述のようにカフェテリアに深く関わる教員が、新たな枠組みの委員会に参加していないということに関係していると思う。

委員会資料のもう一つの問題点は、委員会の議題、配布資料、会議記録以外に、開催案内や、開催場所の予約に関する諸資料、謝金の計算書等の、かなり細かく煩瑣な手続きに関する資料が、一緒に綴じこまれている点である。その結果、ファイルがかなり分厚いものになってしまっている。これらをどこまで残すべきなのかは、検討する必要があるだろう。

同様の問題は、【支出簿】ファイルにもある。支出簿は、各年度の支出の記録であるとともに、その証拠書類から成っている。すべての支出の領収書が綴じられているとともに、支出に関連しての連絡のやり取りや、出張関係の書類なども残されている。そのためかなり分厚いものになっているが、これらはどこまで残すべきなのだろうか。

活動の記録についてだが、まず講座に関しては、担当者とタイトルは、委員会資料のファイルや公開された印刷物に掲載されている。ただしより重要なのは、【平成～年度学芸カフェテリア講座】ファイル（各年度のものがある）に綴じられている、受講学生の名簿と、各回の資料およびアンケート結果である。アンケートには、講座を受講した学生の講座に対する感想等が書かれている。こうした感想はブックレットにも載せられているが、一つの講座に対して1人の感想しか掲載していないので、量的にはファイルに綴じられたアンケート結果の方が、圧倒的に多い。また講座のビデオ記録も残されている。すべての講座で収録されていたわけではないが²³、話の内容や話し方まで含む具体的な記録はきわめて重要である。

学生相談に関する資料はほとんど残されていない。ただ2017年度以降の「キャリアナビ申込書」は【キャリア・ナビ終了分】ファイルに綴じられている。もともと学生相談については、正式な記録はつくられていなかったのだが、今後の引継ぎを考えて、資料を残し始めたということである²⁴。

この他、公開物には見られない特徴的なファイルを紹介しておこう。【学芸カフェテリアライブラリー貸出しファイル】というファイルには、カフェテリア・オフィスに置かれていた2000冊近い本の、学生に対する貸出し簿が綴じられている。貸出・返却の月日は書かれているが、年が書かれていないので、何年のものかわからないが、複数の年にわたって蓄積された資料だと思われる。

また【2009年度進路のあゆみ】というファイルには、2009年～2010年までの『キャリア支援フリーペーパー 学芸進路ナビ@カフェテリア』が綴じられている（創刊号～第8号）。それぞれがA4裏表の1枚ものだが、就職内定者や教員採用試験の合格者に対するインタビュー記事で構成されている。ひと月に2回発行されており、カフェメイツが中心になってつくり、学内の各所に置かれていたようである。これと連動すると思われるが、「2009年 進路の歩み～キャリア補完計画～」というものも上記のファイルに綴じこまれている。これは就職先別（教員、公務員、企業）に、4年生がA4の紙2～3枚ほどに就職活動の経過を書いたものである。全部で30人以上の記録があり、やや厚いファイルになっている。なおこれ以降の年度における同様なファイルは見当たらない。継続されなかったのかもしれない。

3. 資料保存のための視点

カフェテリアに関する資料の一端は、以上のような性格をもつものであるが、ここから資料保存のあり方に関して、どのような視点が導き出されるだろうか。

カフェテリア自体が新しいもの（最近 10 年間のものという意味）であるため、これらの資料は歴史的な価値があると言うよりは、より現代的な価値、言い換えれば、本学の将来構想に役立つ性格をもっていると言えると思う。たとえばカフェメイツの会議記録を見ると、学生が学内で行われているイベント（カフェテリアの講座も含む）をあまり把握していないことがわかる。そのためカフェメイツは、どのようにカフェテリアの講座を周知させるかについて知恵を絞るのだが、そのアイデアは本学の学内広報のあり方に示唆を与えるものである²⁵。また気楽に参加できる講座について学生が意見を交わしているが、これも今後の学内のイベントや、授業そのもののあり方に参考になる点が多い。カフェメイツはファシリテーションに関する研修を受けていたが、それについての学生の反応も残されている。

学生のニーズの把握という点でも、講座の記録、特にアンケート結果は重要である。どのようなタイトルの講座に、学内のどの選修・専攻の学生が何人ぐらい集まり、どのような感想をもったのかという情報は、将来構想に関わるものであり、大学として蓄積すべきものだと考える。ファイルに綴じられたアンケートからは、公刊されたブックレットからはわからない学生の本音がうかがえる場合もある。私には、学生が私生活に役立つ情報をきわめて強く欲していることが、印象的であった²⁶。図書の貸出し簿も、キャリアに関して学生がどのような本を読もうとしたのかということを示すもので、重要だと思う。

なお以上に関しては、いくつか注意すべき点がある。第一にこうした資料は、ていねいに分析をしないと、そこから大学にとっての意味を把握できないということである。そのためには、大学の諸活動についての情報を収集して分析をする機関がないと、資料を残す意味がなくなる。第二に、とは言え、そうした機関がなくても資料を蓄積しておかないと、大学改革等で学内の情報を分析する必要が生じても、質の高い情報は得られない。第三に、ブックレット等の公刊物を保存することで資料蓄積がなされているように誤解される場合があるが、前述のように原資料の方がより詳細な情報を含んでいる。カフェテリアで言えば、ファイルに綴じられた資料は重要である。公刊物があるという理由で、元の資料を安易に廃棄することはできない。

以上のように、カフェテリアの資料は、大学の将来を構想する際にきわめて有効なものになりうる。この点で、私は注 2 で紹介した広島大学の小池聖一氏の考え方に、強く共感する。そして、大学史資料室自体が、本学の将来構想を立案する際に重要な役割を果たすべきだと思っている。

しかし一方で、最初に述べたようなスペースの問題がある。資料を保存するスペースが十分にあれば、カフェテリアの資料は、ファイルも含めて全体を残すべきだと思うが、スペースが限られている場合には、何を残し、何を廃棄するかについての検討が必要である。前述のような委員会の煩瑣な手続きに関する資料や、日常的な支出に関する資料は、将来構想の視点に立てば必要ないように思われる。より重要なのは、会議記録や学生の生の声だと思う。

だが、ここでもまた他方に、アーカイブズの「原秩序尊重原則」がある。特定の視点から無意味だと思われる資料を廃棄することは、原秩序を破壊することでもあるし、また別の視点からはそれは必要な資料であるかもしれない。しかし原秩序が尊重できないのなら、（スペースの問題から）資料は廃棄すべきだという考え方にも賛同しにくい。

完全な正解というものは、おそらく存在しないだろうが、大学史資料室として、こうした問題を丁寧に検討し

ていく必要があることは間違いない。本稿ではカフェテリアの資料に基づいて、大学における資料保存のあり方を模索したが、最後に本稿で言及した資料は、公刊された物以外は、公開されていないことに留意していただきたいと思う。将来、ファイル群が大学史資料室に移管され、公開できることを願ってはいるのだが。

注

1 <http://www.u-gakugei.ac.jp/~houkis/h24tei180002.html> 参照。

2 藤井健志「大学における資料保存の意味と意義」『東京学芸大学大学史資料室報』1（2014。室報はネット上で読むことができる。<http://www.u-gakugei.ac.jp/shiryoshitsu/newsletter/> 参照）。なお広島大学文書館長の小池聖一氏は、大学アーカイブズ（本学の大学史資料室も大学アーカイブズである）の役割として、「大学アーカイブズを文化施設として、あるいは、ハードユーザーである教育史等の研究者のためだけにあるとの認識を持っている者も多いが、それは基本的に間違いだと考えている。機関アーカイブズとして設立される大学アーカイブズ・文書館とは、何よりも、公文書等の管理に関する法律（中略）のもとにある国立大学法人にとって公文書管理業務の中核であり、また、法人業務の合理化に寄与する存在であるべきだと考えている」と述べている（小池聖一「国立大学法人にとっての大学文書館：広島大学文書館を一例に」『東京学芸大学大学史資料室報』3、2016、p.8）。本文で後述するように、私はこの小池氏の考え方は正しいと考えている。

3 ただしカフェテリアが、学内に恒常的に置かれなかったのは、2018年度当時の大学執行部の判断に基づいている。カフェテリアを恒常的な組織にするという判断もありえたからである。

4 以下の概要については、特に根拠を明示していない場合は、本文で後述する『Booklet「学芸カフェテリア」』（第1号～最終報告書、2008～2011。なお以下ではブックレットと略す）および、学芸カフェテリア10年史編纂委員会編『学芸カフェテリア10年史』（同委員会発行、2019。以下では10年史と略す）に基づいている。

5 カフェテリアという名称から、2015年に附属図書館に併設されたカフェ（note cafe）とよく間違えられるが、別の施設である。

6 GPは、Good Practice（優れた取組）の略。

7 ブックレット1（2008）の表紙裏の久保田慶一（当時の学芸カフェテリア・ファシリテーター）「Booklet「学芸カフェテリア」について」による。

8 この名称は、企業の文化活動として行われていた「カフェテリアプラン」に基づいているという（前掲10年史p.7、p.24）。

9 本来スタッフという言葉は、カフェテリアに関わる教員と、大学の正規の事務職員、GPの予算で雇用されたファシリテーター、キャリアプランナーなどの全体を指していたようである（【学生モニター委員会/カフェメイツ会議】ファイルに綴じこまれている「学芸カフェテリア・スタッフ会議」等の記録より）。しかしかなり早いうちから、カフェテリア・オフィスに常駐して会議や講座の企画・運営、人の招致、印刷物の作成、学生相談等に関わっていたキャリアプランナー等を主として指す言葉として使われるようになったと思われる。本稿では、こうした人々をスタッフと呼ぶことにする。なお【 】という括弧については、注20を参照。

10 文部科学省から通常の運営費交付金の他に、このGPのように特別な予算措置がされた場合は、その予算が適正に使われたかどうかをチェックするために、学外の人から成る外部評価委員会が設置されるのが一般的である。

11 講座は学修支援メニューと、キャリア支援メニューに分けられていた。スタッフおよびカフェメイツが、講座の企画・運営を担っており、講師は学外から招くこともあれば、学内の教職員が担当することもあった。

12 「キャリア・ナビ」とも呼ばれており、キャリアカウンセラーの資格をもつキャリアプランナーが相談に当たっていた。

13 オフィスにはスタッフが常駐して相談に当たっていた。また学生が自由に使えるパソコンや図書が置かれており、学生の「居場所」としても機能していた。

- 14 前掲のブックレットの他に、『News Letter』（第1号～第6号、2008～2010）を発行していた。なお本文で後述するフリーペーパーも、印刷物と考えてよいだろう。
- 15 前掲10年史による。
- 16 後述のように学生相談数は、実は記録されていない。ここで述べた数字は、私が資料から把握した2008年ののべ相談者数である（ブックレット最終報告書、p.21）。
- 17 第1号（2008年、全56頁）、第2号（2009年、全75頁）、第3号（2010年、全94頁）、最終報告書（2011年、全130頁）。いずれも年度末（3月）に発行されており、すべてA5版である。最終報告書も第1号～3号と同じ体裁で作られている。これはすべてカフェテリアに残されている。
- 18 第1号（2008年2月発行）、第2号（2008年10月発行）、第3号（2009年4月発行）、第4号（2009年10月発行）、第5号（2010年4月発行）、第6号（2010年10月発行）。体裁はブックレットに似ているが、10頁ほどの薄いものである。内容はカフェテリアの諸活動の紹介、関わる教職員や学生の紹介が中心となっている。これについては、第2号以外が、カフェテリアに残されている。
- 19 これには発足時に関わっていた教員の寄稿が掲載されており、そこからは現在残されている資料からはわからない具体的な状況を知ることができる。ただし全体で73頁の冊子なので、収録されている資料はそれほど多くはない。
- 20 ファイルに綴じられた資料の場合、ファイルのタイトルを【 】で示すことにする。
- 21 削除されているのは、2の（4）「現在の学生支援を行う教職員の資質向上について」の部分と、7の「過去の選定状況」である。図の変更は、よりわかりやすくまとめようとしたもので、基本的な構造は変わっていない。
- 22 たとえば【平成25年度学生キャリア支援センター会議】ファイルに綴じられている「第1回学生キャリア支援センター会議議事要録」。ただし、こうした形式の議事要録は、随所に見られる。
- 23 学内の教職員の講座についてはすべてをビデオで記録し、学外者の講座は講演者によって撮る場合と撮らない場合があったという（2018年現在のカフェテリアのスタッフのご教示による）。ただし著作権の問題もあり、当初より学外には公開していない。またカフェテリア閉鎖後は、学生課で保存するという。
- 24 2018年現在のカフェテリアのスタッフのご教示による。
- 25 教員養成を中心的なミッションとする大学は、原理的に内部が細分化される。そのため学内広報の重要性と必要性は、他の大学より高くなる。
- 26 本学ではあまりこうした情報は提供していない（と言うか、本気に取り組んでいない）が、私立大学ではかなり以前より取り組んでいる。